



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 書評 中野力『人口論とユートピア：マルサスの先駆者ロバート・ウォーレス』昭和堂，2016年

著者	柳沢 哲哉
雑誌名	経済学論究
巻	72
号	3
ページ	101-108
発行年	2018-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027627">http://hdl.handle.net/10236/00027627</a>

## 〈書評〉

# 中野力『人口論とユートピア：マルサスの先駆者ロバート・ウォーレス』 昭和堂，2016年

柳 沢 哲 哉

わが国においてロバート・ウォーレスは、永井義雄による研究を除けば、もっぱらヒュームあるいはマルサスとの関連で論じられてきた。海外ではノーラ・スミスら若干の論者がウォーレスを主題的に扱ってきた。こうした海外の研究に触発されて、中野はウォーレス研究を押し進めてきた。本書はその集大成であり、国内外で最初のウォーレスのモノグラフという記念すべき榮譽を担う。

最初に本書の特徴を2点あげておこう。第1は、宗教と切り離して論じられがちなウォーレスを、シャーの研究を視野に入れながら知的背景としての宗教から捉え直そうとしていることである。そのために、『人口論』（1753）執筆以前の、顧みられることの少なかった宗教に関する著作から検討を開始する。前期ウォーレスの神学的著作の検討は、後期の『展望』（1761）におけるユートピア論の解釈とも関連してくる。第2の特徴は、『人口論』、『諸特徴』（1758）、『展望』などの主要著作にとどまらず、マイナーな著作や草稿までも対象にした広範な文献を分析していることである。これまでのウォーレス研究の中で最も考察範囲の広い労作と言って間違いないだろう。

全11章構成で、第1章の海外研究のサーベイに続き、第2章で初期の宗教論、第3章と第4章で『人口論』を中心とした経済論・統治論、第5章と第6章で1750年代の演劇論争や政治論、第7章から第9章で『展望』の考察、第

10 章と第 11 章でウォーレス以後の文献からマルサスとウォーレスの共通性を考察する。いくつかの論点を含んでいるが、大きくは 3 つのテーマに整理することができる。第 1 は、一見すると矛盾するかに見える農業重視と商工業重視の整合性というテーマである。第 2 は、必然的に崩壊するユートピアという特異なユートピア論をどう理解すべきかというテーマである。第 3 のテーマは、第 2 のテーマとも密接に関連しているが、マルサスの先駆者としてのウォーレスの検討である。

主に第 3、4、6 章で論じられる第 1 のテーマから紹介・論評を加えていきたい。ヒュームとの人口論争で知られているように、ウォーレスは『人口論』で古代の素朴な農業社会が人口増加に有利であると説き、製造業の発展が人口減少をもたらすと論じた。ところが、『諸特徴』では商工業による経済発展を肯定的に論じている。これはウォーレスの経済論における矛盾として、しばしば議論の対象となってきた。中野の整理に従えば、海外のウォーレス研究者のうちスミス、ピーターソン、コ克蘭は『人口論』の農業主義を重視する。これに対して、ディロンは商工業も重視したとする見解をとっている。中野もディロン説に近いが、ディロンの扱わなかった草稿まで丹念にたどることで論拠をより強固なものとしている。

例えば、スミスの場合、『諸特徴』における商工業擁護論は奢侈を批判したジョン・ブラウンへの批判にすぎず、それが対仏戦争中に書かれた時論的な性格であることを強調する。これに対して、中野は『諸特徴』の議論がウォーレスに一貫していることを論証する。その鍵となるのが、これまで等閑視されてきた草稿「スコットランドのジャコバイトへの忠告」(1745)である。そこでは、名誉革命後に国民の生活様式が豊かになったこと、その要因として鉱業、製造業、あるいは貿易の発展があげられている。つまり、『諸特徴』の議論の原型が『人口論』以前から存在していたことになる。しかも草稿「忠告」には、『人口論』と『諸特徴』と「忠告」とが関連を持つという、後にウォーレス自身を加えた書き込みがある(80 頁)。したがって、2 著作 1 草稿は一貫したものとして読まなければならない。

この一貫説にとって障害となるのが、『人口論』における農業重視の主張で

ある。確かにウォーレスは、通説どおりに貿易と商業が農業従事を妨げるので人口を減少させる傾向があると語っている。しかし、中野は農業重視がいかなる文脈で語られていたのかを問題にする。ウォーレスが肯定的に描いた農業社会は土地が平等に分割されている社会であって、土地所有の状態を無視して農業社会一般を人口に有利だと語っていたわけではない。フレッチャーによるブリテン分割論をウォーレスが不可能な提案であると退けていることから分かるように、ウォーレスの古代肯定論は古代への復帰を目指すものではない（115 頁）。『人口論』で語られていたのは、不平等な社会の発展にとって商工業が不可欠であるという見解に他ならない。ウォーレスによる商工業批判は奢侈の行き過ぎを懸念したものであり、それゆえ「役に立つ製造業」と「優雅な製造業」を区別していることを無視するわけにはいかない（106 頁）。ウォーレス自身も自説が矛盾と見なされかねないことを懸念していたから、「私が以前に述べた推論を見失ってしまったとおそらく考えられるのかもしれない。しかし私は、製造業の種類があまりにも多すぎることが不利であるという意見を持っているけれども、いくつかの製造業は常に必要であると認めねばならない」と注記した（107 頁）。スコットランドではまだ奢侈は行き過ぎていないという立場から、『諸特徴』では製造業や奢侈がより積極的に語られていく（178 頁）。さらに、『従順な服従』（1754）、草稿「自由な統治と専制が商業と技芸に与える影響」（1768）にも同様の記述があることから、中野はウォーレスの議論が一貫したものであると主張する。

第 1 のテーマに論評を加えていきたい。ウォーレスを整合的に読み解く中野の解釈は明確で、何よりも広範な一次文献の調査に基づく説得的な議論であると評価したい。農業主義者というウォーレス像は訂正されなければならないだろう。しかし、『人口論』が商工業を否定していたものではないとする解釈は、早くからわが国の研究者によって指摘されてきたものでもある。羽鳥は「農業を重視して奢侈品工業を呪詛したけれども、必需品工業の発展を阻止しようとしたものではなかった」と指摘した（羽鳥卓也『市民革命思想の展開』）。またウォーレスによる注記にも注意を向けながら、「平等な土地所有制は、過去における事例として以外はすがたをあらわしてこない」とする永井の見解は中野

の解釈を先取りしていると言えよう。さらに永井は「農業と工業とは、相互に刺激しあい、また市場を提供しあうことによってともに発展することになっている」と農業と工業の相互需要による発展図式を指摘し、『人口論』を開明的地主層に期待をかけた近代化論とする見解を打ち出した（永井義雄『イギリス急進主義の研究』）。後に永井はヒュームとウォーレスの経済発展論の類似性まで言及している（「ロバート・ウォーレスの名誉革命体制擁護」）。中野にとって永井説の評価は避けがたいと思われるが、残念ながら自説との異同について明確な言及はない。

次に第2のテーマ、すなわちユートピア論についてである。ウォーレスは『展望』でユートピアを構想しながら、家族を持つ不便がないためにユートピアは過剰人口によって崩壊せざるをえないとした。わざわざウォーレスがこの特異なユートピア論を考察した理由は、ウォーレス研究上の論点の一つであった。近年では、スミスら海外の研究者や永井によって、ウォーレスのユートピア論は体制変革や現状批判を意図したものではなく、逆にユートピアの不可能性を明らかにするものであったという解釈が提示されるようになってきた。例えば永井は名誉革命体制を擁護するためのユートピア否定論と解釈する。中野もこうしたユートピア否定論を継承する。中野の新しさは、『展望』全体を神学書として位置づけ直し、ユートピア否定の意義を神義論から説明した点にある。

『展望』はそのタイトル（『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望』）からも、そしてウォーレス自身による主題の提示（「道徳および自然宗教の諸原理を例証すること」）からも明らかなように、神学的な関心から書かれた著作である。『展望』は全部で12の「展望」（章に相当）からなるが、第1展望から第4展望までがユートピアに関連し、後半が自由や幸福に関する議論となっている。後半ほどではないにせよ、前半4展望にも神学的な議論が登場する。したがって、後半の神学的な文脈と切り離すことなくユートピア論を解釈する必要があるという中野の指摘は適切なものである。ユートピアが実現不可能であるとしても、その考察には神学的な意味があることをウォーレス自身も明言している。ユートピアを考察することで、「人間の感情と情念」および「社会の本質と神慮の方法」を知ることができるというのである（194頁）。

ウォーレスによれば人間の情念は、野心、安楽と快楽の愛好、自由の愛好、欲求の競争から生じる諍いの 4 つからなる。私有財産の廃止と教育を特徴とするユートピアでは、これらの情念は社会に適合的なものへと変容できる（200 頁）。情念の変容性を認める点で、ウォーレスはゴドウィンに近い。にもかかわらず、「あらゆることがあまりにも人口増加にとって有利になる」ので、過剰人口となり人類は食糧不足に陥らざるをえない。ウォーレスは自由の乱用を悪徳と見ているのだが、仮に人間の悪徳がなくとも大地の制約という自然の構造からユートピアは崩壊する。人類のいかなる大惨事よりも悲惨なユートピアの崩壊と比較すれば、悪徳によりユートピアの成立を阻止する方が望ましい。このように、悪徳の存在理由を明らかにするのがユートピアを考察する理由である。ウォーレスの言葉を用いれば「神慮が悪徳を利用したであろうというのは疑う必要もない」（205 頁）。中野の言葉を用いれば、「ウォーレスの『展望』の意図は神義論（弁神論）を展開することにあり、ユートピア論もその一部となるのである」（217 頁）。こうした解釈を裏付けるために、中野は草稿「死と悪徳は必要であることを示すための試論」（1764）における完全性の否定と悪徳の必然性の文言にも目を向ける。

第 7、8 章で検討される『展望』後半部は、神義論としてのユートピア崩壊論を補完するものである。幸・不幸の比較衡量から不幸の総量が大きいとするモーベルテュイへの批判は、悪徳があるにもかかわらず現世を幸福な社会とする神義論である（第 7 章）。また、ケイムズの必然論に対して自由論の側から加えた反論は、悪徳の源泉を自由の乱用とするウォーレスにとって、神義論の大前提を説明するものと言えよう（第 8 章）。

第 2 のテーマに論評を加えていこう。中野がリファードした Luehrs（1987）や永井が指摘しているように、『展望』のユートピア論の背後にはヒュームの「完全な共和国」の影がちらついている。ヒューム＝ウォーレス関係という従来の研究上の枠組から見れば、神義論の一部という整理だけでは不満が残るかもしれない。しかし、これまでの研究がとすると「第 4 展望」に集中しがちで、神学的な文脈を軽視してきたのは間違いない。『展望』はウォーレス自身が明言しているように、自然宗教の文脈から解釈する必要がある。それゆえ中

野の分析視角は正当なものであると評価したいし、結論にも異論はない。

とはいえ、ウォーレスの神学をもう少し掘り下げることはできなかったろうか。第 2 章で宗教的著作を検討していながら、『展望』の神学との関係は必ずしもはっきりしない。それはウォーレスの宗教の扱い方に起因している。ウォーレスはしばしば穏健派として括られてきた。それは通説と言ってもよいが、必ずしも明確な規定を持たない穏健派という位置づけは、逆に神学的特質を見えにくくさせたように思われる。もともと穏健派の括りは、神学思想そのものというよりも牧師任命権の受け入れという「教会政治」の立場に由来する。しかし、ウォーレスは牧師任命権に反対していた（132 頁）。そうであれば、教会政治と神学思想とをいったん切り離した上で、とりわけ本書のテーマと関連する後者の内容を整理し直すことが有益だったであろう。「宗教論の異端性」（74 頁）と表現した信仰箇条への署名に対する姿勢も、演劇論争に対する姿勢も、神学思想と無関係ではないにせよ、主に教会政治の領域であろう。他方、神学思想の核心部分である自由論や、注で簡単に扱われている積善説とも見なしうる議論（220 頁）は、カルヴァン主義からの距離といった観点から整理できるだろう。また、「必然論によると、悪徳の存在それ自体も神の意図となる」（209 頁）から自由論であったとする説明と、悪徳の存在理由を神慮で説明したとする解釈との整合性も問われる必要がある。

第 3 のテーマ、マルサスの先駆者ウォーレスにいくつかコメントを加えておこう。「マルサスの先駆者」としてのウォーレスの位置づけは、副題にもなっていることから分かるように本書の最重要のテーマである。このテーマを設定する背景には、次のような先行研究の整理がある。中野はピーターソンに従って、人口の楽観論者ウォーレスとゴドウィン、人口の悲観論者マルサスを対比させる。そして、これまで等比数列的な人口増加という観点からウォーレス『人口論』とマルサスの類似性が注目されてきたが、『展望』におけるユートピア崩壊論は「マルサスの『人口論』とそれほど関連づけられなかった」（294 頁）とする。ピーターソン流の単純化された分類にも異論の余地はある。しかし、何よりも違和感を覚えるのは、ユートピア崩壊論に関する先行研究の扱いである。第 11 章でマルサスの同時代人ヘイズリットを取り上げたのは、ユー

トピア崩壊論にウォーレスとマルサスの共通点を指摘した数少ない論者という理由からであろう。しかし、ウォーレスが提示した過剰人口によるユートピア崩壊論、それに対するゴドウィンの反論、そしてウォーレス流の崩壊論を用いたマルサスによるゴドウィン批判へという展開は、多くのマルサス研究者の共通了解事項と言ってもよい。ヘイズリットのようにそれを剽窃と呼ぶかどうかは別にして、ゴドウィン『正義』に記載されているウォーレスのアイデアを無視して、マルサスがゴドウィン批判を企てたと考えることは難しい。例えばボナーはユートピア崩壊論をウォーレスとマルサスの共通点と見なしている、マルサスの独創性を否定するケネス・スミスにいたっては、ウォーレスのユートピア崩壊論の引用に続けて、マルサスがウォーレスに付け加えたのは「級数(ratios)だけだ」(『マルサス論争』)という、いささか公正さを欠いた評価まで下している。

もちろん、ウォーレス＝マルサス関係がこれまで十分に考察されてきたというつもりはない。マルサスはユートピアの困難を「はかりえない遠い将来のこと」と見なした論者としてウォーレスの名前をあげている。検討されないままに、このマルサスの叙述は受け入れられてきた。細かい点に見えるかもしれないが、ウォーレスではなくゴドウィンに訂正すべきだ、という中野の指摘は重要だ(288頁)。なぜならば、マルサスがゴドウィンとウォーレスのユートピアを区別することなく一体のものとして認識していた可能性を示唆しているからだ。研究しつくされたかに見えるゴドウィン＝マルサス関係でさえ検討の余地が残されていることになる。

過剰人口を用いた神義論という点では、『展望』とマルサス『人口論』最終2章とは共通点がある(295頁)。簡単な言及にとどめているが、この指摘も重要だ。マルサスの思想的源泉、とりわけ神学思想については多くの議論があり決定打はない。ウォーレスの神義論からマルサス神義論への影響関係を論証することは無理であるとしても、少なくとも両者の神義論の比較は検討に値する。これは本書に残された課題というよりもマルサス研究者への課題である。マルサスは悪の存在理由を人間の墮落とする原罪論を採用せずに、人口原理に、別の言い方をすれば自然の構造に求めた。ウォーレスの場合には、ユート



ピア崩壊論経由という回り道を経てということになるが、やはり自然の構造から悪徳の存在を説明している。詳細に見れば、ウォーレスは、自由の乱用を悪徳の源泉としているから、人間の墮落という原罪観を受け入れていると言えよう。だが、悪の必然性そのものは自然の構造から論証されている。このように両者の神義論には共通点があるが、これまで顧みられることはなかったように思う。本書がウォーレス研究のみならず、マルサス研究にも刺激を与えることを期待したい。